

【海外レポート】

メルボルン珍道中

～TBIS-APCC2016に参加して～

三野たまき

信州大学 学術研究院 教育学系

メルボルン初日

平成28年7月12日から15日までオーストラリアのメルボルンのRMIT大学にてTBIS-APCC International Symposiumが開催されました。本年は運よく本学教員海外派遣事業の派遣者に当選し、渡航費を獲得できました。約12時間の飛行で成田からメルボルン国際空港へ降り立ったのは午前1時。ここからホテルまでタクシーで約40分の道のりで、何とかホテルにたどり着き、チェックイン後、一風呂浴びてベッドに潜り込みました。そして約4時間後、“Checking out OK!?”の怒鳴り声とけたたましいサイレンに叩き起こされ、事態の呑み込めない私は、ここはどこ?から始まり、ベッドから跳ね起き、充電しっぱなしのPCや携帯電話を、やっぱりポットが原因かとコンセントから外しまくったのですが、サイレンは鳴りやみません。カーラーを髪につけてパジャマのまま廊下へ駆け出ると、“It’s OK.

It’s practice.”とご親切な泊り客が教えてくれ、脱力したことを覚えています。冬のオーストラリア。まだ寒くて暗い中の早朝の避難訓練は、海外に来て初めての経験でした。

参加登録日

珍しく大学の行事に借り出されることなく、登録日から最終日に至る満日参加ができた学会でしたが、英語及び土地勘のない筆者にとっては、まずは参加登録が一苦勞でした。RMIT大学を地図で調べるとメルボルンの中心よりやや北側に位置するものの、ほぼ中心街でしたので、公共交通機関を使わずに歩いて通える範囲にホテルを予約しました。この目論見が後に大きな誤算となるのですが、写真の建物群は最終日の懇親会会場付近を撮影したものです（確かにここは徒歩圏内）。しかし、登録する場所がわからない。案内メールに添付されたNo.100って何?の疑問は街並みを歩く



①:メルボルン市内の旧メルボルンと呼ばれる地区にある第何番目かの大学の建物。②:大学内のカフェ。③:スワントンストリート側から撮影した16番棟で、レセプション会場。④:最終日の優秀発表賞と優秀研究論文賞の表彰式。⑤:Uwe Reischl教授と。

につれわかりました。つまり 100 番は 100 棟目の建物を意味し、地図を頼りにやっと登録会場の 100 棟目のビルにたどりつきました。

RMIT は町中の歴史的建造物も研究室として使い、近代的な建物とのコラボが素晴らしい大学でありました。メルボルン市内は京都市内と同様の碁盤の目のような道が整備され、市内ならばトラム（路面電車）がただ乗りできます。しかし発表会場は数十キロ市内から離れたブルンスウィックキャンパスにあることがわかり、これらのトラムを乗り継いで、長野-上田間程の距離（さすがにここまで来ると有料）を毎日通うことになりました。

学会当日

毎朝 9 時から始まる基調講演には、様々なジャンルの先生方のお話が聞け、こんな分野にも繊維が使われているのかと思われる楽しいものでした。日本からは梶原莞爾先生（信州大、京都芸工大）が世界でのナノファイバーの使用状況とその展望のご紹介とそのコスト削減のご講演があり、盛んなご質問を受けていらっしやいました（ここで初めて日本人を見かける）。Boise State Univ. の Uwe Reischl 教授は温熱生理学のお話で、被服衛生学の皆様のお話慣れている三野にとっては、それほど目新しいお話ではなく、会員の皆様が参加なさったらきっと一躍トップスターに躍り出るであろうと思いました。数会場に分かれた講演や発表の中で三野が聞くことのできたものだけですが、Donghua University の Xiu-mei Mo 教授のお話は絹を使って編んだ人工血管をラットの大動脈に置換移植し、その後の活動の様子を見るもので、ラットの回復ぶりには素晴らしいものがあり、きっと近い将来ヒトにも応用できるのではないかと思われました。

本年度京都の夏季セミナーで福井大学の堀照夫先生がご紹介なされたスーパー繊維の中の、COCOMI（東洋紡）を使った T シャツの話、石丸園子先生が講演なさいました。衣服に埋め込んだ受信部から被験者の心拍の R-R 間隔を採取し、着用者の生体情報を取り出し看護に生かそうとする話は、多くの参加者のご興味を示し、盛んな質問がなされました。「もし洗濯したならば、どのくらい持ちますか」の質問に、「100 回くらいは大丈夫ですが、それでは不十分ですか？」と返答なさっておいででした。近い将来、この研究も我

々の実生活において、役立つものになるのではないのでしょうか。

衣服圧に関しても多くの研究者がご発表されていましたが、うまく質問できない三野にとっては大変歯がゆい討論となってしまいました。“Do you have any questions?” と促され思わず “Can I speak Japanese?” と Chairman の金井先生（信大繊維）にお願いしましたら、さすがに “NO!” とのご返答。もう少し英語が自由に話せたら、つっこみどころ満載な発表が多かったです。余談ですが、このセッションは日本を発ってから 3 日目で、会場で初めて日本人に合い、日本語が話せました！

学会発表

本人の発表に関してですが、これは悲惨なもので、Oral ならば 30 分で済んだものを、Poster を選んだが故に、有に 1 時間を超える総攻撃を受けました。入れ替わり立ち代わり詳細な質問攻めに、かつてこれ程悲惨で大変な Poster 発表を経験したことはありませんでした。そんな甲斐あってか、最終日の懇親会時に、Outstanding Presentation で call され、壇上で祝福を受けました。これは Poster 発表者のみの特権だったようで、あの地獄の一時間を耐えたが故の功績だと自分を褒めたたえました。これで海外派遣してくれた大学への手土産もできた気分、ほっと一安心したとことを覚えております。

ところで Oral 発表者はどうなるのですかと、当日お隣の席に座られていた信大繊維の若月先生や North Carolina State University の Emiel Den Hartog 教授に伺ったところ、「Full paper 賞があるのでは」と言われ、「ああなるほど」と納得したところで、Outstanding Research Paper 賞にも call され、運良く両賞を頂くことができました。

筆者の研究程度でこれくらいの評価を得るのですから、皆様もどうぞ奮ってご参加ください。きっと良い評価を頂けることと思います。今度は会員の皆様とご一緒できたら幸いです。

<連絡先>

〒380-8544 長野市西長野 6-□

信州大学学術研究院教育学系 三野 たまき

電話：026-238-4182 FAX：026-238-4182

e メール：mitsuno@shinshu-u.ac.jp